

現代英語における関係代名詞の用法

高橋 麻衣子

1. 序 論

関係節構造には、*wh-*, *that*, *zero* 関係代名詞を用いた3種類の表現方法 (The house *which / that / ϕ / Jack built*) がある。これら3種の関係代名詞の違いは、*formal/informal* という尺度を用い、文体的に説明されることが多い。しかし実際には、3種の関係代名詞全てがどのような文体においても使用可能であるということを見ると、このような説明だけでは不十分であるように思われる。一方、伝統文法や学校文法は、格、先行詞、用法という視点から選択規則を設けているが、これにも多くの例外が残されており、統語的な説明によって、3種の関係代名詞の違いをより明確に特徴付ける必要がある。そこで本論では、先行詞と関係節の統語的な結びつきの強さ (*proximity*) と関係代名詞の選択との関わりについて考察、検証してみたい。

2. 選択規則に残された例外と知覚処理上の問題

伝統文法では、主に用法、先行詞、格という3つの要因を関係代名詞の選択の決定要因として扱い、表1のような選択規則を設けている。

表2¹⁾を参照すると、用法、先行詞の性質については書き言葉に関する限り概ね適当であるといえるが、格については、次のような例外がある。

例外 (1) 目的格位置であっても、前置詞の補語の位置では、目的格位置であるにも関わらず *zero* や *that* を用いることができない。

This is the house in **that/* ϕ / which* she lived.
(上山 45) [1]

例外 (2) Bolinger (13) によれば、目的格位置であっても、関係代名詞と関係節の間に副詞が介在する場合には、*zero* を用いる事ができない。

The oranges *that/* ϕ* generally he ate were navels. (Bolinger 13) [2]

例外 (3) Doherty (159) が次の例で示している通り、目的格位置であっても、関係節を外置 (*extrapose*) して文末に置いた場合、*zero* を用いることができない。

Anyone ϕ John personally invited is welcome.
[3 a]

Anyone is welcome ** ϕ / who* John personally invited. [3 b] (Doherty 159)

例外 (4) Jespersen (87) によれば、目的格位置であっても、二重制限構文²⁾において二つ目の関係代名詞は *zero* になることはない。

Is there anything ϕ you want *that* you have not?
[4 a] (Jespersen 87)

例外 (5) Quirk et al. (1250) によれば、主格位置であるにも関わらず、存在構文 (*There Existential*) [5], 分裂構文 [6] では *zero* を用いることができる。さらに Doherty (156) は、*have* 存在構文 (*Have*

表1 Relative pronouns (Quirk et al 366, Table 6. 33)

	RESTRICTIVE		NONRESTRICTIVE	
	PERSONAL	NON PERSONAL	PERSONAL	NON PERSONAL
SUBJECTIVE CASE	WHO THAT	WHICH THAT	WHO	WHICH
OBJECTIVE CASE	WHOM THAT ZERO	WHICH THAT ZERO	WHOM	
GENITIVE CASE	WHOSE			

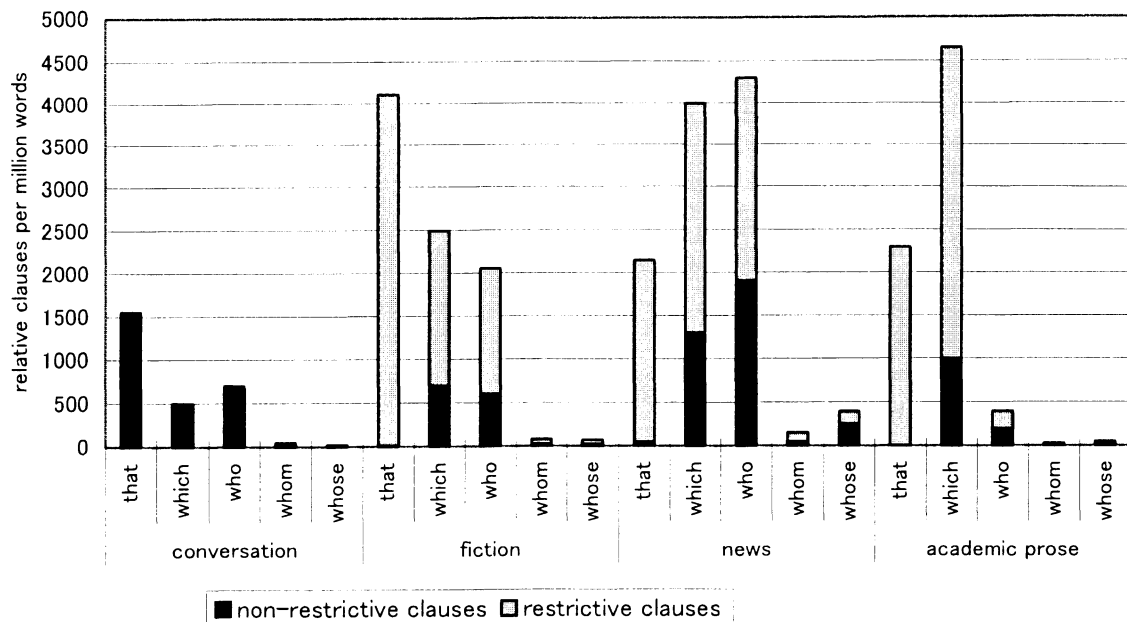


表2 Frequency of relativizers (Biber et al. 610, Figure 8. 14~8. 171)

Existential) [7], 繋合詞文 (Copular Sentence) [8] や, *know* の補語内 [9] でも主格で zero が用いられることがあることを示している。

There's table ϕ stands in the corner. [5] (Quirk et al. 1250)

It's Simon ϕ did it. [6] (Quirk et al. 1250)

I have this friend ϕ lives in Dublin. [7] (Doherty 156)

Is that the boy ϕ was causing all the bother? [8] (Doherty 156)

I know a fella ϕ can get all the tobacco he wants. . . [9] Doherty (156)

以上のような例外が生じる原因のひとつには、知覚処理上の問題が深く関係していると思われる。まず、上山 (54) は、例外 (5) のうち分離構文と存在構文について、「It is にせよ, there is にせよ, ほとんど実質的な意味を持たないために、それに後続する語が主文の主語として再解釈され、そのために補文標識 *that* の付加が、特に口語体では見送られるのではないかと考えられる。」と述べている。

同じように、知覚処理の過程に注目すると、例外 (1)~(5) は全て、先行詞と関係節が離れているため、zero を用いると、両者が隣接している場合と比べて知覚処理上の問題が起こりやすい環境であるように思われる。特に例外 (3) のように関係節が外置さ

れた場合には、もし zero を用いれば、[3 c] のように関係節の直前で文を終えたとしても文法的に整った形をとっているため、その前で文が終了したという錯覚が起きる可能性がある。

Anyone is welcome. [3 c]

二重制限についても同じように、第2関係節の付加がない [4 b] も文法的な形をとっているため、[4 a] では、聞き手/読み手がこの文が二重制限構文であることを認識するのは、関係代名詞の *that* にたどりついた時である。

Is there anything ϕ you want? [4 b] (Jespersen 87)

3. 結びつきの強さ

本章では、2. で述べた例外を処理するため、まず、結びつきの強さと zero に関する Jespersen の説を紹介し、次に統語的な結びつきの強さ (proximity) と関係代名詞の選択規則を再考する。

Jespersen は次のように、zero 関係節 (contact-clause³) の特徴が、結びつきの強さであると主張している。

He has found the key ϕ you lost yesterday. [10]

This is the boy ϕ we spoke of. [11]

There is a man below ϕ wants to speak to you.
[12]

These clauses are here termed contact-clauses, because what characterizes them is the close contact between the antecedent and the clause. No pause is possible before the beginning of the clause, and the words “the key”, “the boy”, “a man below” are felt to be just as intimately connected with what follows as with what precedes them. The close connexion is, perhaps, felt even more strongly in cases like “The key you lost yesterday has now been found in the garden”, where the main verb comes after the whole clause. (132)

Jespersen のいう「結びつきが強い (the close connexion)」というのは、必ずしも統語的な問題に限られてはいない。しかし、統語的な「結びつき」を、先行詞と関係節の密着の度合いであると定義すると、副詞が介在する場合や、関係節が外置された場合、あるいは二重制限の2番目の位置では zero が生起しないという事実は、このような「zero 関係代名詞は他の関係代名詞と比べて先行詞と強く結びつく」という Jespersen の説を裏付ける統語的な証拠となっているように思われる。

さらに、2. で挙げた例外 (1)~(2) を見てみると、ここでは zero だけではなく *that* も使用できないため、結びつきの強さが問題になるのは zero だけではないように思われる。その他に、非制限節もまた、先行詞との間にほぼ確実にコンマが置かれるという点で、制限節よりも結びつきは緩やかである。非制限節内では関係代名詞が *wh-* のみに限られるという事実も、結びつきの強さと関係代名詞の関わりを明らかにするための一つの証拠となり得る。そこで、(1) 非制限節内 (2) 前置詞の補語位置 (3) 副詞が介在する場合 (4) 関係節が外置された場合 (5) 二重制限構文の2番目の位置という、結びつきの緩やかな5つ場合における、3種の関係代名詞の使用可否を表5にまとめた。

表3を見ると、次のような仮説が浮かび上がってくる。

[仮説] 結びつきの緩やかな場合には、zero が最も用いられにくく、*that* は比較的用いられにくい。そして *wh-* は結びつきの強さに関わらず、使用できる位置が最も柔軟である。

そこで以下では、統語的に「結びつきが強い」状態

表3 結びつきの緩やかな場合の関係代名詞の選択

		WH-	THAT	ZERO
(1)	非制限節内	○	×	×
(2)	前置詞に後続する場合	○	×	×
(3)	副詞が介在する場合	○	○	×
(4)	関係節の外置	○	○	×
(5)	二重制限構文の2番目の位置	○	○	×

を、「先行詞と関係節の間にコンマやその他の語が介在することなく、両者が隣接している」、逆に「結びつきが緩やか」な状態を「両者が離れた位置に置かれている」と定義し、論を進める。

4. 現代小説における関係代名詞の選択

本章では、3. の仮説を検証するため、結びつきの緩やかな (1)~(5) の場合に、現代英語において関係代名詞がどのように選択されているのかを調査する。資料として使用したのは、*Eleven Days, Harry Potter and the Sorcerer's Stone* (以下 SS), *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (以下 CS), *Cold mountain* という4冊の現代小説である。

この資料から取り出した総数 1559 個の関係代名詞を、種類、用法、格、別に分類したところ、表4のような結果になった。全ての *wh-* が非制限的に用いられた例が見られたが、zero と *that* の例は一例もなかった。

前置詞の直後で補語として機能する場合に、関係代

表4 関係代名詞の頻度

	格	用法		計
		非制限用法	制限用法	
WHICH	主格	165	9	174
	目的格	40	17	57
WHO	主格	226	210	436
	目的格	1	0	1
WHOM	目的格	9	1	9
WHOSE	所有格	12	4	16
THAT	主格	0	269	269
	目的格	0	89	89
ZERO	主格	0	9	9
	目的格	0	499	499
計		453	1106	1559

名詞がどのように選択されているのかを調査したところ、次の表5のような結果になった。このように、目的格の *wh-* 全てが、前置詞の直後で補語として機能することができるが、*that*, *zero* については、このような例は一例も見られなかった。

関係代名詞の直後に副詞が介在する場合に關係代名詞がどのように選択されているのかを調査したところ、次の表6のような結果になり、*which* や *who*, *that* の直後に副詞が介在する例はあったが、*zero* の直後では一例も見られなかった。

Snape was seeping about in his usual bad temper, *which* surely meant that the Stone was still safe. (Rowling, *SS*, 250) [13]

... I had one *who* actually could be. (Harstad 214) [14]

It was the first thing *that* really worried me. (Harstad 5) [15]

關係節が外置される場合を調査したところ、*wh-* 節や *that* 節が外置される例は見られたが、*zero* 節が外

表5 前置詞の直後で補語として機能する場合の關係代名詞の頻度

	用法		計
	非制限用法	制限用法	
WHICH	14	9	23
WHO	0	0	0
WHOM	7	0	7
WHOSE	1	0	1
THAT	0	0	0
ZERO	0	0	0
計	22	9	31

表6 直後に副詞が介在する關係代名詞の頻度

	用法		計
	非制限用法	制限用法	
WHICH	3	0	3
WHO	3	6	9
WHOM	0	0	0
WHOSE	0	0	0
THAT	0	14	14
ZERO	0	0	0
計	6	20	26

置される例は一例もなかった。

The tricky part was getting onto platform nine and three-quarters, *which* wasn't visible to the Muggle eye. (Rowling, *SC*, 67) [16]

... a stranger turns up *who* just happens to have an egg in his pocket? (Rowling, *SS*, 265) [17]

Then something happened *that* made him jump about a foot in the air. ... (Rowling, *SS*, 115) [18]

二重制限構文の二番目の位置では、*wh-* や *that* が用いられる例が見られたが、*zero* は用いられていなかった。

There's not single witch or wizard *who* went bad *who* wasn't in Slytherin. (Rowling, *SS*, 80) [19]

There's nothin' *that* lives in the forest *that*'ll hurt yeh if yer with me or Fang. (Rowling, *SS*, 250) [20]

The only person ϕ we know *who* may be able to ID the killer is Rachel. (Harstad 256) [21]

... maybe there was somebody else ϕ I could come up with *who* had gotten into the group the same way. (Harstad 71) [22]

... but I was getting the feeling that there was something ϕ I had to remember *that* I had forgotten. (Harstad 318) [23]

5. 結 論

今回の調査では、結びつきの緩やかな五つの場合、すなわち (1) 非制限用法 (2) 前置詞の直後で補語として機能する場合 (3) 關係代名詞の直後に副詞が介在する場合 (4) 關係節が外置される場合 (5) 二重制限の2番目の位置における關係代名詞の選択を調べ、*wh-* は全ての場合に使用可能だが、*that* が使用可能なのは (3) (4) (5) のみで、どの場合にも *zero* は使用できないということがわかった。

このことは、結びつきの緩やかな場合に *zero* は最も用いられにくく、*that* は次に用いられにくく、*wh-* は結びつきの強さに関わらず、最もその位置が柔軟であるという性質を持っていることを意味している。つまりこのことから、現代英語においては、*wh-* よりも *that*、さらに *that* よりも *zero* が、先行詞と強く結びつき易い性質を持っているということが言える。そし

でこの中で、zero に関する結果は、「接触節は常に先行詞と密接に結びつく」という Jespersen の説を裏付ける一つの証拠となるのではないかと思う。

注

- 1) Douglas Biber et al. (610) Figure 8. 14, 8. 15, 8. 16, 8. 17 を 1 つにまとめて表 2 にした。
- 2) 二重制限 (double restriction) とは、二つの関係節が同一の先行詞を制限するもので、Jespersen は次のように説明している。
We may speak double restriction, if two relative clauses are only seemingly coordinated, while really the second restricts the antecedents as already defined by the first : (Jespersen 87)
- 3) Jespersen (1909–1949) は zero が導く節を contact clause (接触節) と呼んでいる。他には、Rodney Huddleston et al. (2002) は zero 関係代名詞を bare relativizer, Quirk et al. (368), Douglas Biber et al. (685) 等は zero relativizer という語を用いる。

参考文献

- 荒木一雄, 「関係詞」『英文法シリーズ 第一集』研究社出版株式会社, 1954.
- Bolinger, D. *That's that*. The Hague : Mouton. 1972.
- Cathal Doherty. "The Syntax of Subject Contact Relatives." *CLS* 29. 1993. 155–69.
- Douglas Biber, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Edward Finegan. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London : Longman. 1999.
- G. SCHEURWEGHS. *Present-Day English Syntax*. London : Longman. 1959.
- Harris, M. and N. Vincent. "On Zero Relatives" *Linguistic Inquiry* 11, 1980. 805–807.
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles III*. Copenhagen : Munksgaard. 1909–49.
- Quirk R., G. Leech, S. Greenbaum and J. Svartik. *A Comprehensive grammar of the English language*. London : Longman. 1985.
- Rodney Huddleston, Geoffrey K. Pullum. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : Cambridge University Press. 2002.
- Shin'ichiro Ishicawa. "The Type of Clause in Which the Relative Pronoun 'WHICH' Tends to Appear – A Research Based on the Dictionaries and the Corpus Data –" 『言語文化学会論集 14』. 言語文化学会. 2000.
- 高橋保夫, 「関係代名詞の省略についての覚え書き」『函館英文学 XL』函館英語英文学会, 2001.
- 田子内健介, 「外置構文」『最新 英語構文事典』大修館書店, 2001.
- 塩谷 亨. 1996. 「関係節の定義と述語タイプ」『室蘭工業大学研究報告 文科編』室蘭大学. 93–110.
- 上山恭男, 「接触節再考」『函館英文学』1998.
- Weisler, S. *Linguistic Inquiry* 11. *The Syntax of That-Less Relatives*. 1980.

資料

- Charles Frazier. 1998, *Cold Mountain*, Sceptre, London
- Donald Harstad. 1999, *Eleven Days*. Fourth Estate, London
- J. K. Rowling. 1999, *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*, Scholastic Press, New York
- J. K. Rowling. 1999, *Harry Potter and the Chamber of Secret*, Scholastic Press, New York